

国際会議参加記

11th International Phycological Congress に参加して 木ノ下 菜々

本国際学会は4年に一度開催されています。修士2年生の夏、初めて参加した国際学会がIPC10でした。この時は、アメリカのフロリダ州オーランドで開催され、立派な会場(Renaissance Orland)と世界中の研究者に圧倒されるばかりで、あまり多くのものを得られなかった記憶があります。今年は学位も取得し、5年間お世話になった室蘭臨海実験所(北海道大学)から下田臨海実験所(筑波大学)に移り、ばたばたとしていた年でもあり本国際学会に参加するか悩みましたが、結果的に参加することにしました。前回参加した時とは全く印象が変わり(会場の違いもあるかもしれませんが)参加者たちがより近い人のように感じられ、これまで知り合うことのできなかった様々な研究者と交流することができ、研究の幅を広げるいい機会となりました。

今回IPC11が開催されたのはポーランドのSzczecinという場所でした。おそらく、多くの方がこの地名を見ても、どうやって発音してよいかかわからないと思います。開催日は2017年8月13日～19日、日本でいうところのお盆にちょうど重なり飛行機のチケットが、高額になる時期でした。そのことも関係してなのか、していないのかわかりませんが、日本人の参加者は思ったよりも少ないように感じました。

本学会の全体を通して、紅藻の研究や藻類に寄生または共生する細菌や卵菌の話が多く、共生進化に関する研究も相変わらず多くありました。私は褐藻の生殖に興味があり、特に配偶子の走化性や走光性の研究を行ってきたため、興味のある中心はここにありますが、前回同様、この分野の研究



Congress にて

は大変少なく、片手で数えることができる程度でした。また残念ながら有性生殖に関するセッション(口頭発表)はたったの1題(How to induce sexual reproduction in centric diatoms)で、モデル生物である *Thalassiosira pseudonana* の成熟をアンモニウムによって誘導することができるという内容のものでした。今回の発表で、最も私の記憶に残ったのは“Chemical composition in Microalgae-How unicellular organisms shape and perceive their environment”というタイトルで発表された Georg Pohnert による珪藻についてのプレナリーレクチャーでした。おそらく、多くの内容は論文として発表されているでしょうから、恥ずかしいことでもありますが、この発表で初めて珪藻の生殖も面白いと感じさせられました。なぜかという、褐藻と珪藻は同じストラメノパイル群に存在するとはいえ、生活環や形態構造が全く異なっているにもかかわらず、これらの生殖様式にもいろいろと共通性が見えてくるのではないかと感じさせられたからです。この発表の後、文教大学の出井先生に珪藻の生殖について写真やビデオを交え細かく教えていただき、いろいろと勉強させていただくことができ、とても有意義な時間を過ごすことができました。

(筑波大学)



Opening Ceremony にて